

③ 「名詞」における待遇表現

小 林 美恵子

(1) 「お」「ご」

インタビューに答えた女性の用いた接頭語「お」「ご」のつく普通名詞を次のように分類、整理した。

- a 相手（インタビュアー）もしくは特定の第三者、またその人のものや行為を表す語につく「お」「ご」＝尊敬語（例）「先生のお話を伺う」「お手紙をください」
- b 話題の人物が特定ではない場合の尊敬、一般的に「世間の人々」とか「視聴者」などや、それに属するもの、行為についたもの（例1）「皆さん、お行儀がいい…」
- c 相手や第三者に対する自分の行為などにつけて、相手を高める「お」「ご」＝謙譲語（例2）「先生にお手紙をさしあげた」
- d 謙譲語のうち、話題の人物が特定ではないもの（例3）「皆さんにお話をした」
- e 自分自身にのみ属し、他者に働きかけない行為やものについたり、一般的な話題となっているものにつく「お」「ご」＝丁寧語（例4）「私はいろいろなお稽古事をしている」
- f 丁寧語の「お」「ご」のうち、すでに「お」「ご」を含むことによって普通名詞化しているもの＝いわゆる美化語（例）「ご飯」「お守り」など。

なお、整理にあたっては、「お年寄り」「お客」のように人を表す語も含むが、「おかあさん」「おとうさん」のような親族名称については別に考えることとし、この表には入れてない。

また、引用されたと考えられる文中の「お」「ご」も調査の対象とはしなかった。

ケース1～22について、それぞれ、どのような「お」「ご」を用いられているかを（表1）のように整理した。同一語が何度も使われている場合は（例数）で表し、「お話し」「話」のように、同一人物が話中で分類を同じくする同語につ

て「お」「ご」をつけずに用いている例がある語には(※)をつけた。さらに、その出現数(のべ)を年代別・職業分野別に表にしてみた。(表2)(表3)

ケース数が少なく、年代、職業的にも片寄りがあること、またこれらの使用については、使用者の語選択にでなく話題内容によって決定される場合もあることに留保はしつつも、(表1～3)から「お」「ご」の使用について次のような傾向が見られるとってよいだろう。

- ・年代的には30代に「お」「ご」の使用が少なく、60代、70代に多い。
- ・職業分野ではスポーツ関係者に「お」「ご」の使用が少ないことが目立つ。また個人差もあるが、映画関係者にも少ない。ちなみに「お」「ご」を全く用いていない人が、22人中4人あったが、そのうち2人はスポーツ関係者(スケート選手、バレーボール監督・選手)、2人が映画制作者である。
- ・報告Iで謙讓表現が少ないことが述べられているが、名詞レベルでみても謙讓語の「お」「ご」の使用は少ない。これは話題の性質によるものか、と考えられる。
- ・尊敬語についても「お」「ご」の出現率は高くないが、ただ特定ではない人々、「皆さん」や、その持物・行為に対して「お」「ご」をつけたもの(b)が比較的高くなっている。これは視聴者を意識してのことであり、話者の意識が反映する部分といえるのではないか。
- ・丁寧語の場合、美化語として現れるものはやはり話題によって規定されるだろうから問題にできるのは(e)の部分である。この部分にはもっとも話者の意識が反映するといえるだろう。
- ・(e)のうち、「お話」「おつきあい」「お芝居」「お仕事」「お友達」などは比較的よく使用もされているし、また話者によって「お」をつけないで用いた例も見られ、話者の意識の反映しやすい語であろうと考えられる。

そこで、次に(b)及び(e)にあげた5語について、どのような用いられ方をしているかをもう少し詳しく見ていくこととしたい。

① 「一般不特定の人々」に対する尊敬語

(b)として分類した「お」「ご」は全部で25例ある。それらの尊敬の対象

(表1) 各ケースに現れた「お」「ご」のつくことば

ケース	尊敬語		謙譲語		丁寧語	美化語
	a	b	c	d	e	f
1	—	—	—	—	—	—
2	—	お年寄り お手紙	—	—	お互い(4)	—
3	ご家族 (夫の家族)	—	お食事	—	お部屋 おつきあい	—
4	ご家庭 (インタビュー アーに)	ご家庭 お客さん(3)	—	—	お昼 お話 ご縁	おじぎ おしゃべり
5	—	—	—	—	お芝居(3)	ご飯 おこた
6	—	—	—	—	お昼	お守り
7	お話 お宅	お行儀(2)	—	—	お稽古事 お経(2) お芝居 お友達	—
8	—	—	—	—	—	—
9	—	—	お手伝い (夫)	—	お誕生日	—
10	—	—	—	—	お稽古	—
11	—	—	—	—	お金持ち お店 お互い	—
12	—	—	—	—	おみそ汁 お水	—
13	—	—	—	—	—	—

ケース	尊敬語		謙譲語		丁寧語	美化語
	a	b	c	d	e	f
14	お手紙 お電話 お話	おかげさま	—	—	お囃子(3)	—
15	—	—	—	—	—	—
16	お子さん	お客様	—	—	お仕事 お芝居	—
17	ご恩 お嬢さん	おかげ	—	—	お仕事(3) おつきあい	—
18	—	お子さん ご意見	—	—	お話 おつきあい	—
19	おふたり	—	—	—	お隣り お向い お手伝い お米 お茶わん おとそ気分	—
20	おうち	お年寄り(3)※ お子さん	—	お話	お金	おムツ
21	御主人	お客様(4) ご常連 ご手配 お客さん お年	—	お返事※	—	—
22	—	—	—	—	お芝居(3) お天気 おしり	おシャカ おなか

(表2) 年代別「お」「ご」の出現数 ()内は1人あたりの語数

年代	a	b	c	d	e	f	(計)
20代 (4人)	2 (0.5)	6 (1.5)	1 (0.25)	0 (0)	9 (2.25)	2 (0.5)	20 (5.0)
30代 (11人)	5 (0.45)	3 (0.27)	1 (0.09)	0 (0)	19 (1.73)	3 (0.27)	30 (2.73)
40代 (1人)	1 (1.0)	1 (1.0)	0 (0)	0 (0)	2 (2.0)	0 (0)	4 (4.0)
50代 (3人)	3 (1.0)	3 (1.0)	0 (0)	0 (0)	12 (4.0)	0 (0)	18 (6.0)
60代 (1人)	1 (1.0)	4 (4.0)	0 (0)	1 (1.0)	1 (1.0)	1 (1.0)	9 (9.0)
70代 (2人)	1 (0.5)	8 (4.0)	0 (0)	1 (0.5)	5 (2.5)	2 (1.0)	17 (8.5)
計 (22人)	13 (0.59)	25 (1.1)	2 (0.09)	2 (0.09)	48 (2.18)	8 (0.36)	98 (4.45)

(注) ケース 1～4 (20代) 16(40代) 17～19(50代)
 5～10 (30代前半) } (30代) 20 (60代)
 11～15 (30代後半) } 21～22(70代)

(表3) 職業分野別「お」「ご」の出現数

	a	b	c	d	e	f	(計)
芸能 (8人)	10 (1.25)	9 (1.13)	1 (0.13)	0 (0)	23 (2.88)	4 (0.5)	47 (5.88)
映画 (4人)	1 (0.25)	4 (1.0)	0 (0)	1 (0.25)	6 (1.5)	3 (0.75)	15 (3.75)
作家 (5人)	1 (0.2)	2 (0.4)	1 (0.2)	0 (0)	16 (3.2)	0 (0)	20 (4.0)
スポーツ (3人)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0.33)	1 (0.33)	2 (0.67)
その他 (2人)	1 (0.5)	10 (5.0)	0 (0)	1 (0.5)	2 (1.0)	0 (0)	14 (7.0)
計 (22人)	13	25	2	2	48	8	98

(注) 芸能…女優、歌手、舞蹈家、講談師
 (ケース3・4・5・7・10・14・16・17)
 映画…監督、製作者、ネガ編集者(ケース8・5・20・22)
 作家…小説家、歌人、脚本家、漫画家、絵本作家
 (ケース2・9・11・12・19)
 スポーツ…スケート選手、バレーボール監督、モータージャーナリスト
 (1・6・13)
 その他…医師、席亭経営者(ケース18・21)

は話し手にとって次のような人々である。

- 自分の書いた本の読者や出演した芝居の観客など自分の作品の受け手としての
人々。

お年寄り・お手紙（ケース 2）、お客さん・ご家族（ケース 4）、お客様（ケ
ース 16）、ご意見（ケース 18）、お客様・ご常連・ご年配・お客さん・お年
（ケース 21）

- 自分の監督した映画の題材となり出演するというような形でかかわりを持つ人。
お年寄り（ケース 20）
- 世間一般

お行儀（最近の高齢者の方はお行儀がいい）（ケース 7）、おかげ（多くの方
々のおかげで）（ケース 17）

また同じような関係において、「お」「ご」抜きで対象やその持ち物を表してい
る例をインタビュー全体から拾ってみた。これは存外少なく拾うのに苦労したが、
次のような例があげられる。

（例 5）（自分の出演作を）あの親というか、家族でみんなで見て、それぞれ
が、親御さんも考えるだろうし、子供もそれぞれ考えるだろうし、ちょっ
とこう見終ってどうい会話かね、その各御家庭で行われるのかなってこ
と、やっているうちから楽しみですよ。 （ケース 4）

（例 6）この人はですね。日本人との間に子供を産んだという—（中略）この
映画をとっている段階ではまだ息子さんに言ってなくて、だから息子は知
らないということを非常にこう気がかりな感じで話をしてくれたんですけど…（自作に出演したパプアニューギニア人の女性について）（ケース 8）

（例 7）（自分と共演した）出演者の人たちの家族が幌馬車が組んであって（中
略）こういうふうに円陣を組んでそこで奥様とか子供たちがこうたわむ
れている…（ケース 14）

（例 8）（老人ホームにいる老人の）家族の方が熱心に来て下さる…（ケース
20）

（例 9）町に住んでいる方一人一人、それからもう小さいお子さんも、やっぱ
り年寄りのこと考えなきゃいけないなっていう、こういう気持ちにね、自

然になって…(ケース 20)

(例10) おおぜいのスタッフの心がこもっている…(ケース 22)

この他に「お子さん」といわず「子供」といっている例などもあげられるが(「お子さん」や「お客さん」から「お」をとった語形はないので、対応するハダカの形を考えるとそういうことになる) これについては「人をあらわすことば」の項で触れたい。

さて、あえて「お」「ご」のついていない例をあげてみていえるのが、これらが必ずしも「お」「ご」がつくべきところから脱落しているという例でなく、むしろ「お」「ご」をつけることによって装飾過多の文脈になってしまいそうに思われる例であることだろう。すなわち(例5)については同一文中で「親御さん」「御家庭」などの敬意を示す語が既に使われているし、(例6)や(例7)でも「息子さん」や「奥様」の語に、話し手が話題の人物への敬意抜きにしゃべっているのではないことを感じさせる。もっとも特に(例6)の話者については、話の中に一度も「お」「ご」を用いていない特徴はあり、他の話者であれば(例6)のような「話」に「お」をつけるということもあり得るとは考えられそうだ。(例7)にも同様のことはいえる。(例7)の話者は「子供」について語ることが比較的多いが、例文にも見られるように「お子さん」という語は全く用いない。(例6・7)に見られるような特徴は、いわば「お」「ご」の使用の少ない30代の個性を現しているともいえよう。(例8・9)の話者(同一人)はむしろ(b)に属する「お」「ご」を比較的よく使用している方である。(例18)の「家族」の方は「のかた」という語にいわば人をあらわす敬意的部分をになわせたと言えるだろうが、(例9)の「年寄り」については他の部分ですべて「お」をつけていることから、また例文中での「お子さん」との対応からも「お」をつけてもよいという気がする。いわば、これが全体での唯一の「お」脱落例であるともいえよう。(例10)についてはあえて例としてあげる必要もないだろう。特定の個人ではない第三者(仕事仲間たち)の「心」だから尊敬すれば「お」がつくということで、ここにあげたが「お」をつければ、むしろ文としては丁寧すぎて尊大で不自然なものになってしまうだろう。

② 「お話」「おつきあい」「お芝居」「お仕事」「お友達」

自分自身に属する場合や、一般的な話題としての「話」「つきあい」「芝居」「仕事」「友達」には、話者によって「お」をつけている例とつけずに用いている例が見られる。それらの使用の状況は(表4)のとおりである。

(表4) 5語についての使用状況 (○…「お」をつけて用いた例あり)
(×…「お」をつけずに用いた例あり)

ケース	(年代)	(職業)	話	つきあい	芝居	仕事	友達
2	20	作家		○			
4	20	芸能	○		×		
5	30	芸能			○		×
6	30	スポーツ					×
7	30	芸能	○×		○		○
8	30	映画					×
9	30	作家	×			×	
11	30	作家				×	×・友人
16	40	芸能			○	○	
17	50	芸能		○		○	
18	50	その他	○	○		×	
20	60	映画				×	
21	70	その他		×		×	
22	70	映画			○	×	

(表4)で見る限り、これらの「お」の使用の状況に年代による影響はほとんど見られない。あえていえば職業意識を反映した個人差が見られるとはいえるかもしれない。ケース7・16・17・50は、これらの語のうち複数のものに「お」をつけているが、この4人のうち3人までが女優、講談師、歌手など芸能関係者であることが注目される。また、特に「仕事」についてはこの語を用いた8人のうち6人までは「お」をつけず、「お」をつけている2人は芸能関係者である。この2人の「お仕事」の用例は次のようなものである。

(例11) スケジュールがずっと重なっちゃってるんでなかなかほかのお仕事できなくなっちゃったんです。(ケース16)

(例12) 学校のコンサートで歌わせていただいて。これは教職員の互助組合のお仕事で…(ケース17)

これらの例、特に(例12)などには女優や歌手が、自分の持っている芸を発揮するために与えられた場としての「仕事」という意識が現れているのではないかと考えられる。このような意識は自ら企画し、作品を作り上げることによって、いわば場を築いていく作家や映画製作者には稀薄なのではないか。これは言い方をかえれば、プロデューサーや観客との対人関係の中で仕事をする立場と、完成された仕事を供する立場の差といってもよい。完成されるまでは対人を意識せずにすむ作家や映画製作者はそれゆえに「お仕事」とは言わないとみられないだろうか。このことは「お仕事」のみならず、一般的な丁寧語「お」「ご」の使用にも影響しているといえる。(表4)でみても複数の語に「お」をつけずに用いているのは、16・17の作家と、21の席亭の経営をし、むしろ他者に仕事の間を与える立場にある話者とである。また「お」を複数につけた残りの1人であるケース18が、本人は医師で、患者である他者に仕事の間を与えられる立場であることもこれに矛盾しない。もっともこの話者は「お仕事」とは言わず「仕事」と言っているのであるが——少なくとも「お」をつけることによって得られる全体的な丁寧さは職業意識との関係の方が、年代差などよりも大きいということはいえそうである。

(2) 人をあらわすことば

① 自分の家族をどう言うか。

a) 「父」「母」をあらわすことば

22人の話者のうち9人が自身の父または母について語っているが、そのうち7人は「父」「母」と言っている。父母の表し方において特異なのは5(30代、女優)と11(30代、作家)の2人である。

ケース5は、有名な喜劇役者である自分の父やまた、母を話題にして「あの人は何を考えてるのかわからないですけど…」 「お父さんほとんどうちにてなかつた

たから…」 「(自分の作ったギョーザを) お母さんとか兄弟のみんなおいしい言ってくれるけどお父さんはどうか」のように語っている。またケース 11 は自分の両親についていろいろと語っているが、両親を表す語は例外なく「父親」「母親」(各 8 例)である。ふつう「父親似のこども」とは言っても、「父似のこども」とは言いにくい。不特定多数にむかって「いつまでも母親に甘えてばかりではいけない」というような言い方はできるが、これを「母」でおきかえることはしにくい。「子どもは母に甘えた」という場合の「母」はその子どもにとっての特定の人間としての「母」を指しているといえよう。いいかえれば、「父」「母」が親族名称であるのに対し、「父親」「母親」は概念をあらわすことばなのである。こうみると、自分の親を「父親」「母親」と呼ぶ意識の中には、親を自分を産んだ特定の存在とみる、もしくは自分がそれに属するものとしてみるというよりは、単に「自分の父・母である人」として客観的に見ようとする意識があるのではないかと考えられる。「あの人」と呼ぶような意識にはさらにそれが如実にあらわれているといってよい。実をいえば 30 代の話者 11 人のうち両親を話題としているのは、この 2 人のみであり、他の 9 人に関しては自分の父母を指す語は全く現れない。20 代、40 代以上を含め他の世代では父または母について触れている話者が 7 人、世代にかかわらずおり、しかもその人々が、「父」「母」の語を例外なく用いているのをみると、30 代の「親離れ現象」(話題的にもことばの上でも)があるといってもよいのかもしれない。

ケース 5 の自分の父母をあらわす「お父さん」「お母さん」はこの話者の個人的なことば選びかと思われるが、同じような言い方として、ケース 7 のゲスト(20 代、講談師)が自分の祖母を指して「おばあちゃん」と言っている。この話者は話の中で伯父を指しては「伯父」と呼んでいるから、身内には「ちゃん」や「さん」をつけて話さない、といういわゆる敬語のルールについて無知であるとか、あえてルールにはずれようとしているわけではないだろう。この「おばあちゃん」は自分を幼いときから特にかわいがってくれた祖母に対する一種の親愛表現と見ることができないのではないか。このようにみるとケース 5 の「お父さん」「お母さん」にも同じような意識があることも考えられる。

「おじいさん(ちゃん)」「おばあさん」は、「祖父」「祖母」よりも使いや

すいことばであるのか、ケース19も自分の父親について、自分の息子から見た立場として、「祖父」でなく「おじいちゃん」「おじいさん」を用いている。

(例13) 非常に父はこの孫を愛し、孫はこのおじいちゃんをしたってましてネ。

おじいさんがなくなってから…

なお、自分の祖父母をさして「祖父」「祖母」としている例は1例もなかった。

b) 「夫」をあらわすことば

話者の中には夫がいる人もいない人もあるが、話題の中で自分の夫に言及しているのは22人中8名である。彼女たちがその夫をどう呼んでいるかを次にまとめる。(表5)

(表5) 夫をあらわすことば

ケース	年代	職業	夫をどうあらわすか
3	20	芸能	彼(×2)
6	30	スポーツ	夫
9	30	作家	主人(×6)
12	30	作家	夫・彼
13	30	スポーツ	主人(×2)
14	30	芸能	彼(×2)
18	50	その他	夫
20	60	映画	主人(×4)
21	70	その他	主人(×2)

ここで注目すべきは、自分の夫を「主人」とは言わない人が、半数をこえていることである。その年代も20代から50代にわたり、職業分野もさまざまである。中に「彼」と呼んでいる話者が3人あるが、この場合も、「主人」とか「夫」とかの語で提示したあとの単なる三人称として「彼」を用いているのはケース12だけで、他の2人は「夫」「主人」と同じように「彼」を用いている。つまり、「彼」は「夫」や「主人」と並んで夫を指すことばとして選ばれた語であるといえる。ケース14は娘についても「彼女」という呼び方を用いている。30代のこの歌手の家族との距離のとり方を示しているようで興味深い。これらの語が、各人によって意識的に選択されたものであることは「夫・主人」「彼・主人」のような併用の例がないことからあきらかだろう。なお9例の場合もインタビュアーから話者への問いかげの中で話者の夫を指すことばは「ご主人」である。インタビュアーに「ご主人は…」と問いかげられても、「主人は…」とは返さずあえて「夫」や「彼」で答えていることは、はっきりとこの語を選んだ意識をあらわしている。ただおもしろいのは「彼」とか「夫」と自分の夫を称する人のそれらの語の使用回数が「主人」と称する人のそれに比べると少ないということだ。ケース9・20では「主人」はそれぞれ6回、4回と高い頻度であられるが、特に「夫」を用いる2人は、その語を1度ずつしか使っていない。このあたりには疑問を持たずに「主人」を用いる人が「主人」を連発、多用しているのと比べると、この語を使いたくない人の側のこだわりが感じられる。あるいは話題に夫をのせることへのこだわりの差ともいえるのかもしれない。

② 家族以外に用いる親族呼称

ここで問題としていきたいのは、誰かにとって祖母である、母であるということを示す「おばあさん(ちゃん)」「お母さん」のような言い方でなく、単に年取った女性、中年の女性といった意味で使われている「おばあちゃん」「お母さん」また、「おじいちゃん」「お父さん」「お姉さん」のような親族呼称である。

(表7) 一般名称として用いられた親族呼称

ケース	年代	職業	
2	20	作家	おばあちゃん
7	30	芸能	お姉さん
8	30	映画	おばあちゃん
14	30	芸能	おばさん おじさん
17	50	芸能	おばさん
19	50	作家	お母さん おばはん
20	60	映画	おばあさん
22	70	映画	おばあちゃん

ここで表でもっとも目立つ「おばあちゃん(さん)」について少し詳しくみていく。

(例14) 自分の行ったことのない、あの土地のおばあちゃんなんかから、あの若返りました。なんてね、お手紙頂きますと…(ケース2)

(例15) これは、ココナツを削ってですネ、どうやって日本軍の人たちに食べ物を供給したかというのを実演しながら話をしてくれたおばあちゃんたちですけど…(ケース8)

(例16) この方はね、自分のひ孫にあたる小さい子供がうちでその病気になっているから、自分が行って介護・看病しなければいけないと思いこんでいるおばあさんなんですけど…(ケース20)

のように話者の年代にかかわらず、老婦人をさして「おばあちゃん(さん)」ということが見られる。出現数としては「おばさん」「おばはん」も同じように現れるが、この場合、ケース14では幼かった自身から見た近所の「おばさん」(「おじさん」)であるし(これはケース7の「お姉さん」についても同様である)、

17 および19は他者(子供や若者)から見た自身の立場を「おばさん」「おばはん」と言っているので、「おばあちゃん(さん)」の用いられ方と同列には論じられないように思う。年取った人々を「おばあちゃん」「おじいちゃん」と呼ぶのは、呼ぶ側からすれば親しみの表現なのだろうが、呼ばれる側からすると不快である、という意見は最近しばしば耳にする。「孫以外にはおばあちゃんとは呼ばれたくない」という論調の投書などを見ることもよくある。尊敬する年長者を「おばあちゃん」「おじいちゃん」と呼ぶことはないのだから、その人の個としての存在を親族呼称のうちに溶かし去るようなこの言い方は一種の蔑称であるということも既に指摘されている。これらは「おばさん」や「お母さん」にも同様に存在する問題ではあろうが、少なくとも今回の調査の対象となった話者においては前述のとおり、「おばさん」や「お姉さん」は現在の話者の立場で他者を指して言う語として用いられてはいない。ケース19の「お母さん」は唯一、「おばあちゃん」に近い例かとも思われるが、「生活や文化を伝えていくものだと考えている若いお母さんのグループに会いますとね、やはりうれしいですね」という文例の、「お母さん」が生活・文化を伝える相手としては当然その子供が考えられるから、この場合、子を持つ若い女性＝若いお母さんと考えられているわけで、単に老いた女性をあらわしている「おばあちゃん」と同じように用いられているとはいいいにくい。そうなると「おばあちゃん」と同列なのは、「ぼうやちゃん」「お嬢さん」「お子さん」(後出 表11 参照)のような子供を指すことばだけである。これらは親しみはこめられていても、尊敬されるべき存在として大切に扱われているとはいいいにくい。このような語が実際に年代を問わず—70代の話者にまで用いられているのである。しかも、なぜか「おじいちゃん」は孫から見ての祖父をあらわす場合以外には用いられていない。もっともこのような語に対する抵抗感もあるのか、ケース2は「お年寄りの方」を併用しており、老人の世界に関心を持ち、それをテーマに映画をとるケース20も「おばあさん」は1度だけで他は「老人の方」「お年寄り」「年寄り」などの語を用いている。またこれに類する語としてケース21が「御年配の方」という言い方をしていることもつけ加えておく。

③ 「～さん」「～さま」

a) 「みなさん」「お客さん」「お子さん」

頻出する3語について、「さん」「さま」がつく例、また「(お)客」「子供」「みんな」のように「さん」や「さま」のつかない場合の使い方を調べてみた(表9～11)。

これらの3語は便宜上まとめて扱うが、実際にはその現れ方には差異がある。「みなさん」の場合自分を含む人々を言う場合には「みんな」を用いるだろうし、他者を指したり、相手をふくむ人々に呼びかける場合には状況や語の選択の意識の違いによって「みなさん」とも「みんな」とも言える。「お客さん」の場合も、自分の行為や一般的な行為として「お客に行く」というような場合には「さん」はつかない方が当然であるので、他者が「客」になる場合に「さん」や「さま」をつけるかどうかが問題になる。また「お子さん」についても、自分の子を指さないのはいうまでもない。

(表9)からは、「みんな」と「みなさん」の使い分けが、話者の年代とか職業分野によるのではなく、また個人的な意識の差異は多少反映するにしても、むしろ「皆」で指される人々によるのではないかと考えられよう。自分を含まない特定の他者を指す場合、もっとも一般的なのは、もちろん「みなさん」であるが、それが、高校生・学校友達・子供など年齢の低い者である場合「みんな」を用いる傾向がケース4・12・17の例には見られる。その他に「みんな」が使われているのは、

(例24) (自分の出たドラマ)を親というか家族みんなで見てそれぞれが、親御さんも考えるだろうし、子供も考えるだろうし…(ケース4)

(例25) 私を知っている人はドジだドジだとみんな言うんですけどもね…(ケース13)

(例26) (痴呆性老人は)お話しすればとんちんかんていう感じですけど(中略)自分がそれなりに、一所懸命生きたいという気持はね、みんなかわらずに持っている…(ケース20)

(例27) (老人問題にとりくむ経過を映画化することに決まった町の人々が)お年寄りの面倒ちゃんと見なきゃいけないとみんな思わなきゃいけないし…(ケース20)

(表9) 「みんな」 「みなさん」

ケース	年代	職業	相手や特定の他者を示す	一般的な「人々」を示す	自分を含む「人々」を示す
1	20	スポーツ	—	—	みんな
3	20	芸能	観客のみなさん(×2) 歌手の方みなさん	みなさんの心に感動を与え る(×2)	—
4	20	芸能	高校生 みんな	家族 みんなでみて	—
7	30	芸能	お年寄りの みなさん	—	—
8	30	映画	パプアニューギニアの みなさん	—	—
11	30	作家	まわりの みなさん(×2)	—	—
12	30	作家	学校友だちの みんな	日本人は みなさんやさしい	—
13	30	スポーツ	—	私を知っている人 みんな	—
14	30	芸能	「呼びかけ」みなさん(いら してください)	であう人たち みなさん	—
16	40	芸能	共演する女優 みなさん	—	—
17	50	芸能	ラジオのスタッフと子供たち みんな(×2)	高島敏弘の みなさん	—
18	50	その他	読者のみなさん	—	—
20	60	映画	観客 みなさん 老人 みなさん(×2)	町民 映画の出演者 みんな みんな	だれもが みんな(×2)
21	70	その他	講師たち みなさん	—	—
22	70	映画	観客の みなさん 他のエディター みなさん	俳優 仕事をくれる人 みなさん みんな	— 映画にたづさわ る(×4)

(表10) 「お客さま」「お客さん」

ケース	年代	職業	
4	20	芸能	お客さん(×3)
16	40	芸能	お客様
21	70	その他	お客様(×4) お客さん

(例28) 何かしなきゃいけないとはみんな思っているんですけども、何をどうしていいかっていうのは、これからみんなで考えていく事ですね。(ケース20)

のような例である。このうち(例24)(例26)は、話者によっては「みなさん」を用いたかもしれないと思われるような例で、個人的な語選択の傾向の現れているものといえる。(例27)(例28)は老人問題を映画作りと並行して考えていこうと決めた町の人々を指しており、直接的には話者は含まれていないのだが、その映画を作る立場として、またその町の人々に限らず誰もが考えていかなければならないことを話題としているという意味あいにおいて、「みんな」という語が選ばれたかと考えられる。

「お客」で特徴的なのは、「さん」よりは「さま」をつけて用いる傾向である。話者は3人だけでいずれも女優(ケース4・16)や席亭の経営者(ケース21)と、自分で演じ、もしくは演じる場所を持つ立場で、そこに来てくれる観客を指して言ったことばである。ケース4(20代)だけが「お客さん」と言い、年長の2人は「お客様」とおもに言う。ケース21の「お客さん」は直接自分の席亭に来る客を指すのではなく「(講談師に魅力のある話しを身につけて)まず、お客さんをつけてもらいたいと思うんです」と希望している文脈にある。「みなさん」で見たように自分の芝居の観客や読者を指す場合も「みなさま」は用いられていなかったから、「お客さま」の語選択は、語としての特性によるところが強いのだろう。ただ20代の話者に関しては年代的な影響もあるかと考えられる。

「子供」に関しては「みなさん」とは逆に、「お子さん」とは言わないほうが普通である。

(例29) (幼い頃、TVドラマで) 子供の役かなんかでちょっとやってみてん

(表11) 「子供」を
あらわすことば (※については母にとっての関係をあら
わし、年齢的な子どもではない。)

ケース	年代	職業	特定の子供	一般的な子供
4	20	芸能	—	親御さんも 子供も～
7	20	芸能	お姉さんや年下の子	子供の役
8	30	映画	パプアニューギニア人で日本人との間に子供を産んだ人の息子さん*	—
12	30	作家	—	子供たちに伝えたい 子供の本の勉強
14	30	芸能	出演者の奥様と子供たち	—
15	30	映画	息子さん*	—
16	40	芸能	なくなったお子さん	—
17	50	芸能	(高島炭鉱の)子供(たち)(×10) お嬢さん 子	—
18	50	その他	近所のお子さん ぼうやちゃん	お父様が子供の受験にとりく む例もある
19	50	作家	となりの子 むかいの子 息子さん	アジアの子供たち
20	60	映画	ひまごになる小さい子供	小さいお子さん
22	70	映画	村の子供さん	—

ですね。(ケース7)

(例30) 子供たちに伝えたいかどうかわかりませんが、やはりいいストーリーを通して(中略)希望をもって前向きに行けば必ずどうにかなるというふうな(ストーリーを書きたい)(ケース12)

のように概念としての子供や、子供一般を指す場合はいうまでもないが、特定の子供を指す場合にも「お子さん」より「子供」を使う方が多い。特に、

(例31) 児童劇団とかに行っちゃうと、ほかに年上のお姉さんもいるし、年下の子もいるしで、なおかつ音楽やバレエとかいろんなことが習えるからいいんじゃないか…(ケース7)

(例32) 幌馬車がこういうふうに円陣を組んで、そこで出演者の奥様とか子供たちがこうたわむれている…(ケース14)

(例33) 私のいろんな情報の中ではお父様が子供の受験に一所懸命取り組んでいらっしゃる方もいらっしゃるんですよ…(ケース18)

のようにいわば対になってあらわれる「お姉さん」「奥様」「お父様」には「さん」や「さま」をつけているのに、子供を「お子さん」とはしていない例もある。ケース17も子供を中心とする話題をしゃべり、その中で「お嬢さん」という語を用い、「生徒会長さん」「副会長さん」などと同じ子供を指しているにもかかわらず、「お子さん」という語は1例も使っていない。「子供」に対して敬称を用いないという傾向は前述の、子供に関しては「皆さん」といわず「みんな」と呼ぶ傾向と一致して、興味深い。

なお70代のケース22が「子供さん」という語を用いているが、これは他の話者には全く見られず、この年代の話者としての特徴といえることができるかもしれない。なお、「ぼうやちゃん」「お嬢さん」(小学生の少女を指して)なども、その使用が50歳以上に限られているのが目立つ。

b) 職業・役職をあらわす語につく「さん」

(表12)に見る通り、職業や役職などを表すことばに「さん」をつけて用いた。例が比較的多い。これらは、特定の誰かについてその職業名や役職名で呼んでいる——いわば尊敬語的な用法の他に、一般的な概念としての職業名を表す場合、たとえば「(私は)保母さんにはならなかった」(ケース14)のような例にも及

(表 12) 職業・役職を
あらわすことば

※は職業名・役職名とは言えないが、それに類する立場としてこの項に分類した。

ケース	年代	職業	「～さん」		特定の職業	「さん」がつかない場合	
			特定の人を指す	概念としての職業		特定の人を指す	概念としての職業
1	20	スポーツ			監督		
2	20	作家			生徒		ウグイス嬢 先生 教師
3	20	芸能			先生 歌手の方	スタッフの方	*
4	20	芸能			生徒		先生 高校生
5	30	芸能			演出家の方		
7	30	芸能		女優さん	師匠		
9	30	作家					作家 アンスタント
12	30	作家		コックさん			
13	30	スポーツ					選手 コーチ キャプテン
14	30	芸能		保母さん			
15	30	映画		職人さん			
16	40	芸能		女優さん			
17	50	芸能		副会長さん 生徒会長さん		先生 報道の方々*	教職員
18	50	その他		患者さん*			
19	50	芸能			先生 男衆		教師 高校生
20	60	映画		看護婦さん 町長さん		事務局の人*	
21	70	その他		監督さん 芸人さん		先生	
22	70	映画		俳優さん ボクシ		スタッフ* 監督 エディター	職人

んでいる。

この場合「さん」がつくかどうかを決めているのは、話者の年代や職業、またその個人的な意識というよりは、職業名であるといつてよいのではないだろうか。通常「さん」をつけて用いることが可能な語については、尊敬語的に他者をあらわす場合はもちろん、一般概念としての職業名をあらわすような場合にも「さん」をつけて用いられている語が、年代・職業にかかわらず多い。たとえば「女優さん」「コックさん」「女工さん」のようなものである。これに対して「さん」をつけることが可能な語で「さん」をつけずに用いているのは「生徒」「師匠（お師匠さん）」「男衆」「職人（ケース22）」「監督（ケース1・22）」ぐらいであろうか。このうち「師匠」は自分の師について語ったものであること、また「師匠」という語そのものに「先生」と同様に敬意が含まれているし、「男衆」も自分の生家である店の人について言ったものである。「職人」「監督」については話者によって「さん」をつけて用いている例と、そうでない例が見られる。このうちケース1の用いている「監督」はスケート競技の監督である。スポーツ関係の用語では「選手」にしても「コーチ」「キャプテン」にしても「さん」をつけては用いにくいと思われるし、そのような語の延長として「さん」をつけずに用いられているとも考えられる。他の「監督（さん）」2例はいずれも映画監督であるが、ケース21は「さん」をつけているのに対し、ケース22はつけずに用いている。22は「職人」にもつけておらず — この場合、「職人や女工さん」と並列している「女工」には「さん」をつけている — この話者のことば選びの特性が現れているといえるかもしれない。しかし、この話者も他の語には「さん」をつけている。特に「ボジさん」「スクリプトさん」などという言い方には、映画の職業分野での特殊用語が現れている。「スクリプター」といえば「エディター」と同様に「さん」をつけずに用いることになるであろう「スクリプトさん」という言い方などに特にそれがはっきり現れている。一般に「アシスタント」「コーチ」「スタッフ」「エディター」のような外来語には「さん」はつけられていない。また「生徒」に関しては、先に述べた「子ども」を表す言い方に「さん」をつけないことと同一の現象として見ることができるだろう。

「さん」をつけない言い方としては他に「先生」「ウグイス嬢」「演出家（の

方)」「作家」「報道(の方々)」などの言い方も見られるが、「先生」はもちろん、「ウグイス嬢」の「嬢」の部分「～家」と表す職業名やさらにそれに「～の方」をつけていう言い方は、それ自体のうちに敬意を含んだ例といってよく、全般的に、話者の年代・職業にかかわらず、職業・役職などへの敬意は定着して用いられているといえよう。

④ 自称代名詞「わたし」と「わたくし」

一般的な女性の自称は「わたし」および、そのあらたまった形とされる「わたくし」である。このインタビューでもそれ以外の自称代名詞を用いている話者はいない。ただ聞きようによっては「あたし」「あたくし」と聞きとれる場合も多少存在するように思われるが、明確なものではないので、「あたし」は「わたし」に「あたくし」は「わたくし」に含めてどのようにこの2語が使われているかを整理してみた。(表13)

表13に見られるのは次のような傾向である。

- ・時間的にはほぼ同じ長さのインタビューであるが、その中で使われる自称代名詞は、話者によって0(ケース5)から31語(ケース11)まで大きな開きがある。その出現数の平均は、9.73語であるが、年代的に見ると30代以下の若い世代にその使用数の方がどちらかというとな少なく、40代以上の方がよく使っている。
- ・30代前半以下で「わたくし」を用いている話者は1人(ケース2)しかいない。他はすべて「わたし」のみを用いている。
- ・「わたくし」のみを用いているのは3人(ケース12・13・4)だけである。また「わたくし」を「わたし」よりも多く使っているのは60～70代のケース20・22、40代のケース16と、30代のケース11・12・13の6人である。
- ・「わたくし」の使用の度合も傾向としては30代後半以上に多く、特に60・70代ではどのケースも「わたし」よりも優位に立っている。

以上から、22名の話者のうち少なくとも19名までは「わたし」という語彙を持っており、生活の中に「わたし」を用いて話す場も持っているであろうことを予想させる。「わたし」が女性の自称の本来的なものとしてあり、場に応じて「わ

(表13) 年代別に見る「わたし」と「わたくし」の出現

	20代			30代前半			30代後半			40・50代			60・70代					
	ケ 1 ス	わ た し	わ た く し	ケ 1 ス	わ た し	わ た く し	ケ 1 ス	わ た し	わ た く し	ケ 1 ス	わ た し	わ た く し	ケ 1 ス	わ た し	わ た く し	計		
1	4	0	4	5	0	0	11	13	18	31	16	4	8	12	20	6	9	15
2	3	0	3	6	13	0	12	0	5	5	17	0	13	13	21	0	4	4
3	9	5	14	7	1	0	13	3	5	8	18	13	10	23	22	4	13	17
4	6	0	6	8	2	0	14	5	0	5	19	12	1	13				
				9	9	0	15	3	0	3								
				10	13	0	13											
平均 (%)	5.5 (81.5)	1.25 (18.5)	6.75		6.3 (100)	0 (0)	6.3	4.8 (46.2)	5.6 (53.8)	10.4		7.25 (47.5)	8.0 (52.5)	15.3		3.3 (27.8)	8.7 (72.2)	12.0

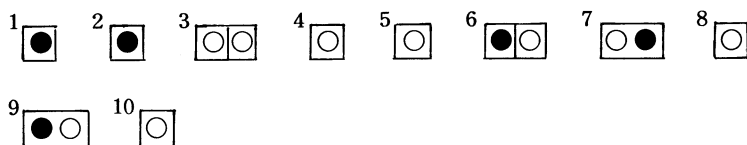
たくし」を用いる意識は、年代が高くなってから後発的に現れてくるのではないかと考えられる。「わたくし」を用いようとする意識が現在の40代以上に特有なものであり、30代以下は今後も「わたし」をおもに用いて話していくのか、30代以下についても今後年代が上がっていくにつれ「わたくし」を用いるようになっていくのかは、この調査の限りでは定かではない。ただ20代のケース2や30代のケース11のように若い世代にも少数ではあっても「わたし」の中に「わたくし」をまじえて話している人はあり、完全に「わたくし」は使われえないというふうには将来もならないだろうとはいえる。

ところで、30代に少なく、年代が上がるにつれ増え、特に60・70代に多く使われているということでは「わたくし」の使用の傾向は「お」「ご」の使用の傾向とよく似ている。「わたくし」も「お」「ご」もいわゆる丁寧さをあらわすことばであり、旧来の女性のことばが丁寧であるべきものとされたというような価値観からいえば、これらのことばは年代の高い人の方がより女性らしいことばを用いているということのパロメーターと考えられるだろう。一方30代前半および20代のほとんどの話者のことばは少なくともこの部分に関しては特に性を感じさせないものとなっているということもいえる。


次に「わたし」と「わたくし」両方を使用している話者について、どのような状況（場面・話題）で使いわけをしているかを見てみたい。

20代における例外的な存在であるケース3は次のように「わたし」「わたくし」を用いている。

(図1) ケース3(20代・芸能)



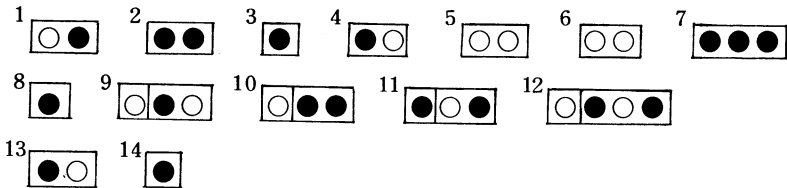
この図で1～10の番号を打った□はそれぞれ一つながりの話題であり、その中の○は「わたし」●は「わたくし」を表す。[●○]は、話題としては一続きだ

が間にインタビュアーの質問や合いの手が入って、話者のことばがとぎれている時、 は話者の話が continuing している中で自称代名詞が何回か用いられているような場面を示す。

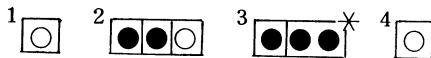
ケース3に特徴的なのは、全体の始めの話題や、一続きの話題の最初に出てくる自称代名詞に「わたくし」が多く、その話題が続いていくうちに「わたし」になっていくということだろう。話題1・2・6・9にそれが現れている。唯一の例外は7だが、この話題での「わたし」は「わたしたち」という形で用いられている。ケース3は意識して「わたくし」と話しはじめるが、話題が興に乗ってくる「わたし」になるという形といえよう。

次に、「わたくし」「わたし」をどちらも使っている各世代のケース11・13・18・20について同様に図示してみる。

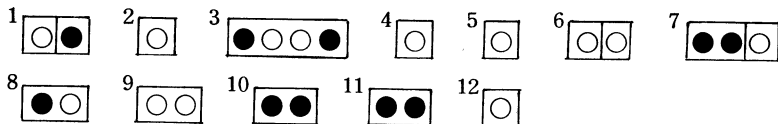
(図2) ケース11 (30代・作家)



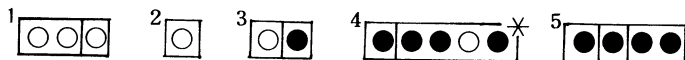
(図3) ケース13 (30代・スポーツ)



(図4) ケース18 (50代・その他)



(図5) ケース20 (60代・映画)



ケース11・13・18・20には、ケース3に見られたような傾向はほとんどない。後に述べるようにケース13および20には話題による語選択の傾向があるかと考えられるが、ケース11・18に関してはそのようなこともないようで、一見してほとんど何の基準もなく、そのときそのときに思いつくままに「わたし」を使ったり、「わたくし」を使ったりしているかのようだ。ことにケース11のインタビューの後半などは「わたし」と「わたくし」が交互にめまぐるしく現れている。

ケース13は、バレーボールのキャプテン・監督である女性が、その抱負などを語っているが、話題1がキャプテンであることについて「いや、わたしはそんなたいしたことないけど、まあほかにやる人がなくてキャプテンをやっているようなもんなんですけどね」といわば謙遜している文脈、話題4が、自分のみかけによらずおちょこちょいだという性格をエピソードをまじえて語っている文脈であり、ここでは「わたし」を用いるが、間でバレーボールの監督としての意見・抱負などいわば本題を語っている話題2・3は、おもに「わたくし」を用いて話している。また、ケース20は、話の始めの方、自分の撮った映画について話している部分は「わたし」で、後半になり自分を助けてくれる母や、プロデューサーの夫のこと、また女性の映画監督としての視点や、後進への期待などを語る部分が「わたくし」と使いわけられている。このような話題による使いわけの傾向はケース22（70代・映画）にも見られ、話の導入やしめくくりの部分は「わたし」で、仕事について語るいわば本題部分は「わたくし」で語られる。とはいえ、三者を見ても、特に共通した話題による使いわけの基準は見られず、これらの語選択はあくまでも個人的なものなのではないかと考えられる。

なおケース19（50代・作家）は、全体を「わたし」で話す中、ただ1度だけ「わたくし」を用いている。これは「わたし — わたくし自身」と言い直している部分である。この「わたくし自身」については、ケース13・17・20も用いているが、全部を「わたくし」で通している17はともかく、13・20についても「わたし」ではなく「わたくし」に「自身」がついており（図3、5の*がそうである）他に「わたし自身」と言った例はないことから、「自身」がつく場合、「わたくし〜」となりやすいようだ。

(3) ま と め

一般的に女性のことばは男性よりていねいであるといわれる。名詞でいえば、「お・ご」の使用や「さん・さま」の用い方、また「わたし」と「わたくし」の揺れなどにそのことが現れる可能性があると考えられるだろう。実際に調査を試みたところでも、職業名につける「さん」とか「わたくし」という語の現れ方などは、（この調査の場合、対照する男性が、インタビュアー1人であり、しかもインタビューする側とされる側という立場の違いもあることから、はっきりと断言することはむずかしいが）男性の場合にはこのように現れないのではないかという印象はある。名詞が話題と密接に関連して選ばれ、語としては述語部分から独立しても用いられ得るということから、述語部分と比較して、旧来のいわゆる女性らしい言語的特徴を残しやすいということも考えられる。

ただ同じ女性でもその名詞における待遇表現の選び方にはかなりの差異があるということも言える。「お・ご」の使用や「わたくし」の使用、一般名称として「子供」をあらわす言い方などには年代的な差異が現れ、30代を中心とする若い人々は年配の人ほどにはこれらについてていねいな言い方はしていない。また芸能関係者の用いる「お客さま」や、「ポジさん」「スクリプトさん」の「さん」のように、ある種の職業に従事している人の「業界用語」として選ばれていると考えられる語もある。さらに「主人」や「おばあさん」のように話者によって、何らかの意識によってその語を選ぶことが避けられていると考えられる語もあり、年代・職業的環境、物の考え方や言語感覚などが影響した個人的意識によって、さまざまなことば選びがされているわけだ。したがって「女性は～である」というような形でひとまとめに傾向をいうことは非常にむずかしい。

ただ、前述のとおり、若い年代の人の方が「お・ご」の使用や「わたくし」の使用が少ないことや、「主人」を用いない意識のあらわれなどは、少なくとも旧来的な女性らしいことばがそのまま維持されていくのではないことを示している。名詞の場合、述語部分などに比較すれば、話し手によっては旧来的なていねいさを残している部分もありはするが、性差のないことばの方向への移行はここでも確実に進んでいるといえるのではないだろうか。